

---

# 幼なじみが彼氏になった瞬間

頬白丼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼なじみが彼氏になつた瞬間

### 【Zコード】

Z8111B

### 【作者名】

頬白丼

### 【あらすじ】

失敗したら氣まずくなるとか、そういう覚悟をして、幼なじみに告白しました。そしたらYESの即答です。嬉しいんだけど……私、これからのこと考えてなくて……。

(前書き)

この作品はフィクションであり、人名等はほとんど架空のものです。

「ずっと好きだったの……彼氏に……なつてくれるかな？」

「いいよ」

あつさつとした答えに、一瞬耳を疑つた。

十六歳の私が、十六年前から知つてゐる彼。<sup>やなぎさわ</sup>お隣さんの幼なじみだから小中はもちろん、高校まで一緒に柳沢大地に告白したというのに。

「何だよ。返事したんだから、喜ぶなり何なり、フイーバーしろよ」そんなこと言われても、答えとしては最高なのに、予想外の返答で困つてゐのですが。

「えつと……大地は幼なじみでお隣さんで、フラれたら非常に氣まずことになるとこいつことを承知で告白したかい……あつさつしきて、ちょっとビックリします」

フラれて私が泣いちゃつても平氣なよつこ、わざわざ私の部屋にまで呼び出したんだから。

「……まあ俺サンも、紗緒と幼なじみでお隣さんで、フツたら非常に氣まずいことになると思つたから承諾した……ワケじやなくて。いわゆる両想いってヤツだ」

私のセリフを引用して返してきた。最後が違つて、ちょっと嬉しい。

「つて、大地、私の事が好きだったの？」

「ん。紗緒の事じやなくて、だつたじやなくて、紗緒が好きだぞ」ややこしい言い回しなので、意味に対して嬉しさ半減。

「……じゃあ、ラブラブでいいの？」

「いいんじやね？ 僕サンと紗緒がどうすりやラブラブかは、解んねえけど」

ぬ。考えてなかつた。告白の「とばつかで、その後はまったく抜け落ちた。

「えつと……一緒に通学したり」

「今朝も昨日も一昨日も、先週の金曜も以下略で、幼稚園レベルで一緒にだが」

……そう言えば。

「一緒にお弁当食べたり」

「それは弁当になつた中学から。クラス違つても一緒に食つてたような」

大地のお母さんが作る玉子焼きが美味しいのは、この時に知りました。

「じゃあ私がお弁当を作る!」

「前、そのお陰で遅刻したな。一人揃つて遅刻したもんだから、かなり冷やかされたぞ」

明日からは、その冷やかしを否定しなくていいと。

「休み時間にお喋りしたり」

「それ、ツツコミを入れられなくなるくらい、うちのクラスじゃ自然な風景らしいぞ」

「それじゃあ……」

「つてか、学校限定ラブラブなのか?」

変な言い回し……ともかく、確かに、学校での話ばっかり。

「え……じゃあ一人きりでカラオケ行つたり……」

「俺サンは歌わねえよ」

そういうえば、大地を含めて何人かとカラオケ行つたとき、大地は場を凍り付かせてた。

「映画行つたり」

『『女友達と恋愛映画観るの恥ずかしい』』って、もつ十回は言われてるが

映画みたいな恋愛に憧れるけど、現実はそうでもないと噛みしめてる感じです。

「ボウリング行つたり」

「中学のとき行つたな。ガーターしないヤツをいまだに使つてるのは

は、紗緒ぐらいいだぞ」

「う、……じゃあW.u.iで……」

「IJの前、俺サンをリモコンで殴つただろ」

……軽く振るだけで遊べるよつです。

「じゃあ、部屋で一人きりで話したり……」

「いままさにその状況ですが」

「……宿題一緒にやつたり」

「おう。お陰で俺サンは助かってるだ」

大地の宿題、半分以上私がやつてるよつな……。

「ときどきお泊まり会したり」

つい言つちやつたけど、よくよく考えると……。

「そーいや、ときどき紗緒がうち来たり、俺サンが紗緒んち行つたりするな」

軽く大胆発言でしたが、お互にお泊まりを普通にしてました。家

族ぐるみ万歳。

「えつと……じゃあ……」

困つた。思いつかないぞ……。

「……他に？」

大地が訊いてくる。いや、考へてるから待つて……。

「なんか、今まで通りでラブラブじゃね？」

そつか……そう考へると、なんかそんな気がする。

いろいろ彼氏彼女な感じのことを考へたけど、そのどれも、私たちが普通にしてる」と。

つてことは……。

「え、じゃあ……いろいろ覚悟して告白したけど、その前からラブラブだったってこと？」

「そんな感じだな」

なんてこと……。これじゃ、覚悟した割には、新しく得たものが全然無いじゃない……。

確かに大地は彼氏になつたけど……。そんな『呼び方』じゃなくて、

もつとこう、実際に『相手が彼氏だからこそ』の事がないと、ただ彼氏イナイ歴がストップしただけ。

「紗緒？」

大地が呼ぶけど、なんか、返事する気力がない。

「オイオイ、がっかりすることは無いだろ。どこの世界に、告白が上手く行って、がっかりするヤツがいるんだ。『ここにいる』以外の返事でようしく

「だつて……頑張つて告白したのに今まで通りつて……」

「じゃあさ、目え閉じてよ」

え……そのセリフ……恋愛映画では……その……。

私は、目を閉じた。何も見えない。けど、目の前にいるハズの大地を感じながら。

胸はドキドキ。

いつ来るか分からない、大地を待つ。

この待ち時間が、心地良い。

私はこういうのを期待していたのかもしれない。

今までも、周りからは恋人同士と言われたり、彼氏がいる友達からは“私たちより仲良いじゃん”と言われたり。

それでも“幼なじみ”という関係が、大きな壁となつて、決定的なことには踏み込めないでいた。

その壁を壊したかつたんだ。私は。

もう、私たちは“幼なじみ”じゃなくて“恋人同士”になつた。だから、こうして……。こうして……。

あれ？

ちょっと、大地いつまで待たせるの？  
なんか、全然顔が近づいてくる様子がないのですが。  
薄く、目を開けてみた。

……何でケータイを向けてるんですか?  
シャツタ音が鳴ったので、『写メのようですが。  
。

「何期待せんのよ！」  
と、怒ったとこまで『写メを撮られる。

「期待してたんだ」

「え……ほら、その……流れ的に」

「場の勢いで、体を預けちゃいけないな」

「はい、気を付けます……って何で私があやま……」

最後まで言えなかつた。

途中で、口を塞がれたから。  
ゆっくり、目を閉じる。  
長い。

出会いて十六年。

十六年分のファーストキスは、お母さんが晩ご飯を知らせるまで、  
ずっと続いた。

(後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。

前回は恋愛の名を借りたコメディだったので、せくつと、100%恋愛なストーリイを書いてみました。

完全単発ネタで、制作時間も超短い物ですが、感想等頂けますと、非常に嬉しく思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8111b/>

---

幼なじみが彼氏になった瞬間

2010年10月8日14時56分発行